

農事組合法人竹井営農組合 代表理事

西垣和義さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「米価が下落傾向にある中、耕作放棄地を出さず農地を守るためには法人が必要だった」と法人設立時の思いを語るのは、南丹市園部町竹井地区の農事組合法人「竹井営農組合」代表理事の西垣和義さん(74)。

竹井地区は同町西部に位置し、水田を中心に45畝の農地が広がる中山間地。近年、同地区でも高齢化や担い手不足が深刻になり、離農者や耕作放棄地の増加が心配されている。そこで、地区内の農家が集まり、農業の将来像について話し合いを重ね、府やJA、近隣の法人にも相談し、2011年から5年かけて法人化を検討。16年3月に集落農家84戸が組合員となり、同組合を設立した。「近年は株式会社を選択するケースも多いが、多くの農家に参画意識を持ってもらうために農事組合法人を選択した」と西垣さんは話す。

その後、新たに2戸の組合員が加入し、集落内のはほぼ全農家が組合員になったことから、地域の結束力も高まり、法人の強みになっている。

法人設立後は、担い手不足対策として作業員登録制度をつくり、組合員が作業に出役しやすいように本業と調整して、出られるときに出てもらうことで作業員不足を解消している。法人内で知恵を出し合うことはもちろんのこと

と、法人の存在価値を高めるために、JAからの営農指導や情報提供、資金面の援助などさらなる支援にも期待を寄せる。

西垣さんは「法人設立してまだ2年だが、農地を集積し耕作放棄地はゼロとなり、組合員からは頼りになると喜んでもらっている、しかし、今後も高齢化が進み、農業を継続できない農家が増え、耕作放棄地が出てくることか



▶ 法人を支える西垣和義代表理事(右)と加藤浩史理事(左)

放棄地解消、地域守る

予想される。今後も法人が地域農業を支えるためには、機械の導入などによる省力化や、さらに収益を上げて法人の経営を強化しなければならない。また、ネットを張って対策はしているものの、猿、鹿、イノシシによる被害が絶えず獣害対策の強化をする必要があり、課題も山積している」と現状を話す。

「現在、黒大豆を1・8畝作っているが、将来的には経営の柱になるように、4畝から5畝に増やし、10畝収も2000kgを確保したい。リスクの分散や収益源としての新たな品目の導入も検討している。焦らず一步一步着実に取り組んでいきたい」と西垣さんは地域農業の将来を見据えた思いを語る。

■法人所在地 南丹市園部町竹井辻田61。(電)0771(63)0870(小寺克彦副代表宅)。

■法人概要 2016年3月設立。理事7人、監事2人、組合員農家87戸。経営面積 19・3畝(特別栽培米こしひかり「京みのり」13畝の他、もち米・加工用米「京の輝き」、キヌヒカリなど計16・8畝、丹波黒大豆1・8畝、京都大納言小豆46kg、水稻育苗ハウス7棟25kg)。農機 トラクター5台、田植機・コンバイン各2台、水稻乾燥調製施設一式(乾燥機4台、のみすり機2台、色彩選別機1台)。